

しょうこう きぼう  
「お焼香作法」



ほんぞん あお み  
・ご本尊を仰ぎ見る



かたほう て しょく はし そ  
・片方の手を卓の端に添え、  
香を2回つまんで香炉へ



がっしょうらいはい  
・合掌礼拝



かる ずらい  
・軽く頭礼をする

※「真宗大谷派 お内仏のお荘厳(名古屋教区教化センター)より

焼香は、香炉に炭火を埋め、その上から沈香や五種香を焚いて、仏前を荘厳する仏教儀式です。一撮(さつ)二撮と焼香するごとに立ちこめる香りは、あたりを包みこんでいきます。煩惱いっばいの身の私も、ふと気がつくとき、その香りの中にあります。

「仏法は聴聞にきわまる」とは、私たち真宗門徒が大切にしてきた伝統です。毛穴から染み込むように教えを身にいただいてきた念仏者を、親鸞聖人は「染香人(ぜんこうにん)」と讃えています。焼香の場に身をおくとき、怠惰な日々を教えられていくのです。

真宗大谷派名古屋別院



〒460-0016 名古屋市中区橋2-8-55

でんわ 052(321)9201

FAX 052(321)3184

<http://www.ohigashi.net/>

03.12.5000

このリーフレットは、環境に配慮したインク、用紙を使用し作成しました。

「ご冥福を  
お祈りします」  
って

言わないん  
ですか？



真実の教えに出遇う  
であ

higashi betsuin

「ご冥福をお祈りします」って  
言わないんですか？

尾畑 文正

お葬式も終わりに近づくと、司会者によって弔電が披露されます。そこで決まって出てくるお悔やみが「ご冥福をお祈りいたします」という言葉です。弔電の慣用句としてあたりまえのように使われています。しかし、この言葉で果たしていのちを終えられた人に対する私たちの哀悼の心が十分に表わされるでしょうか。

この「ご冥福」という言葉は、どこまでも霊の宗教を前提にして初めて成り立つ言葉です。霊の宗教とは霊が「肉体に宿り、または肉体を離れて存在すると考えられる精神的実体。たましい。」(広辞苑)といわれているように、私たちがいまここに人として在ることに即して、「霊」というような存在、あるいは「霊の世界」が在るということを認め、そこから物事を考えていくひとつの宗教観です。

この宗教観念は非常に古くから日本人の生活に根差しているもので、霊を説かない仏教の中にも入り込んで独特な世界を形成しています。その典型的な考え方は、人は死んだら霊となって、あの世(冥土・冥界)に移り住み、この世(顕界)の吉凶禍福を左右するものとなるから、この世に生きるものは、死んで霊となったご先祖を大切にお祀り(祭祀)し、お慰め(慰霊)し、お鎮め(鎮魂)し、さらには供養しないと、崇られ、災いを被るといなのです。

こういう考え方を背景にして、死者の「あの世」での幸福が祈られているとするならば、その祈りは、死者を悼むことではなく、



中陰壇の前に座り、  
ふと思つこと……。

死者を崇る存在、災いをもたらす存在として忌み嫌い、ないがしろにすることとなるのではないのでしょうか。

私たちがいのちを終えられた人に向き合う道は、死者を霊などと称して「あの世」に封じ込めることではなく、むしろ、かけがえのないひとりの人の死を通して、「人はだれもが死すべき存在である」とはっきりと気づかさせていただくことです。

死すべき自分の存在に向き合うことによって、この与えられた、かけがえのない、一回限りの生を、大切に、また尊く見つめて、一瞬一瞬、責任をもって完全燃焼させていただくことです。

それが、何時果てるともわからない戦争の歴史、差別の現実など、問題いっぱいの私たちの人生を、ごまかさないで「我がこととして」引き受けて、立ち上がっていくことです。

(おばた ぶんしょう 同朋大学教授)